



有形文化財（工芸品）

43. 金銅馬頭観音懸仏 1面

こんどうばとうかんのんかけぼとけ

■指定年月日 平成5年3月18日(1993)

■寸法 像高(蓮座共) 8.0cm 幅 4.9cm

■所在地 若山町上山10-11甲

■所有者 ^{かみやま}上山神社

懸仏は、鏡面を模した銅製や木製の円盤に、神仏の像を鑄出したり、とり付けて、堂社の内壁に懸けて礼拝したもので、御正躰みしょうたいと称する事もある。

懸仏に、仏や菩薩像などが多いのは、日本の神の本地ほんじ(元の姿)は仏であるという本地垂迹すいじゃくの思想からである。懸仏は鎌倉時代ごろから供養・修法に用いられて全国の寺院や神社に普及するようになったといわれている。

本像は銅で鑄造され、全体に鍍金されたもので、鍍金の跡もよく残っている。頭頂に馬頭をいただく三面二臂ひ(3つの顔と2本の腕)の像容で、胸元で印を結び、結跏趺坐けっかふざ(座禅の座り方)する。馬頭観音は、観音としては珍しく憤怒相ふんぬそうで表されること

が多く、本像も目を吊り上げ、歯をむき出している。

馬頭観音の懸仏は、残された例は極めて少ない。しかもこの懸仏の保存状態が極めてよく、どっしりした重厚感にあふれるものである。円形の銅板に別鑄の厚肉の立体像をとめる様式は鎌倉時代の技法であり、この懸仏はその典型とされる優品であり、鏡面がないのが惜しまれる。